



深橋

数入百記

ふ

遠13
1796
2





門へ 13
 希 1735
 卷 2

第二卷

- 一 地^ちの^の火^ひて^て屋^やわ^わり
- 二 瓢^{ひょう}箆^{へい}う^うう^う約^{やく}う^う出^で現^{げん}
- 三 鶴^{つる}蜂^{はち}お^おら^らら
- 四 冠^{かん}者^{しや}な^なら^らん
- 五 葉^{えつ}苞^{ほう}り^り合^あ全^{ぜん}
- 六 侍^し理^り解^{かい}
- 七 織^お鬼^にも^も人^{ひと}教^{がう}



① 燈明の火で尻あがり

生おまは合はりりあまやうのまけあや
くまひいと。鳥のみね月におまどいあまも
魚より田螺も解およと。何れも青か
ぬ目も形くまうありさけ。あうはてうあ
わううおん竹あうくてもあまはう生書
すくもあうは兵屋の編あううやう
寔跡くう大軍よと。定書くあま入て
取も巻と猿が餅實やうよこまういよ

書人をもはほごうゆ後をほおご燈明の
火で尻あがりねなぐだくくあまはう
去佛のああさび。櫻くそすまはけあ
らうとわくさうれ柿もんえぬ人も
金納をりあう。尻又大なり一月新
またびをき。取書人か鬼といふあ
じこうえき書かふといふくやうぬ亂て已
かぬと書よ。田もや海味とや海とがう
そくうよ尻も猿ぬ糸のぬか人も



皆^{しん}王^{せい}の^き氣^き質^{しつ}ま^ろく^く我^わく^にな^をを^を及^及
 る^るを^を隣^{りん}さ^びけ^まや^た愛^{あい}儲^もる^るを^を
 又^{また}ま^まの^の徳^{とく}を^をも^もか^かよ^よし^しる^る氣^きが^がほ^ほけ^け
 り^りと^と弦^{げん}の^の音^ね別^{べつ}が^がん^んそ^そて^てさ^さら^ら及^及の^の
 観^{かん}あ^ある^るく^くた^た又^{また}宴^{えん}へ^へ生^{せい}て^て来^こよ^よや^や所^{しよ}を^を
 佛^{ぶつ}と^とす^すに^にま^まん^んと^とす^すは^はさ^さま^まが^が思^しひ^ひを^をた^たへ^へ
 不^ふた^たり^り

二

新築しる物

若の肉果の四のちを代めたる今に計のせんを
 号く人の約束をなれ流はとまぬものれ
 ちえおと人 黙然と語人しるぬ若は大病
 乃 墨粧末のもたらぬり。 儀約紙は海
 桶の女房の先へおちの尾おを鳥や若
 の身ぶるひとてぬまなり。 生針の葉の
 種をぞん進けく 雲流はかなのしとて
 笑はへんりまぬが 啼はへんりまぬが 獅

子の居合はよ命にたがされ。 人世をうへ 庭を歌
 がんぞのしする 海響ぞく。 ぞおちて 舞や
 大木はあらんと 地はけりん。 雲のいぬぬまて 種
 をけぬぬと六実まぐら。 おぬ棚がまがら
 産まのまゝ合せ。 子孫を教はわれが 力控較
 を解くと一人娘を養ふを 質を踏ぬは
 敵のありう 助んと 雲の相及 おまの おや
 ちん子まぐらすとまぬ ぬはけり 娘は歌のん
 子まぐらす。 個の種はくら柳や。 若おはけり 兒

今お茶の研後又力をとらうぬお勤やうせ
 う。てんまなり融えたる人をとらうん
 祝の海を越えを志し鳴子の辰留の物で
 姫もてはし小舟舟て玉飾る傾玉乃
 志すぬ。習ふなり。和や。室又田舎の大
 煮ふふまは細て糸通ふ。是の裏の短粒
 はてとらぬ中とらる。糵と人延曲瑞
 の内。二ふとらぬとらぬの二天田天乃
 志すぬ。研たたら糵もおさうれ。外

又多行きき思ふ。おはねとてん祝はて十方
 此の勤お害く月がさけハ注ぎよまれ
 出さぬのありで。けしきと生玉と名
 志すぬ。京西焼うまはひけめこのは焼う
 皮かきう。糵はうりれ兄中や。南せ二室
 一しうぬ。佛。それと名の人も望よ身
 猫が糞うんごぬ。糵もよみ新て
 おさうけりき。勝の下れ。智恵を。海し
 あまこの入るて。糵。うれはぬ。糵。や



幸事又存すと。去きて
 杖獨昂其程
 こそ秋發切て出てり。又をさるるこり
 唾の多々維又流人ふも水く。鈍く切座
 昔よぬれ我も同く。法函修りよと
 車。半よいふはて。吾老も糸よのり糸
 し。字も引さる。郭公。笑の内を。あや
 いかや。きふく。る。男と。加ひ。ハ。靴。穿。き。う
 駒の出。出。さ。る。る。例。や。男。を。控。て
 こそ。流。れ。も。阿。比。

(三) 鶻蜂相持

我國家又鶻と蜂のせむふありあは
お拒呵ハ和勝して治うがよし。いらは時ハ
まにあらぬ人食うふもあは。蟻ハ服
めりて年ささるは母ハ年さく
服まし。ははは。おささしめて遠不
漢取来うとるそ。氣を付れは母ハ
毒をまて一はよあ申あく。趣うたぬ
あまらハあすれハ。終り念以わひたり

我常朋友の交に賣こと。案よ。冥あを
本を本合ハ。〇。頑よ。えハ。物ガ殺擣
あく。こらう。す。六。大。と。勝。な。る。友。傍
案の不知ハ。大。器。威。揚。蜂。と。歎。は。く
と。也。物。も。少。強。欲。と。正。申。よ。す。れ。と
一生。い。し。ん。ぐ。な。い。ま。あ。又。負。て。計。色
いら。も。縁。ど。我。場。あ。く。命。を。惜。ハ。大
江。法。老。氏。さ。く。し。と。命。捨。る。が
手。柄。て。は。る。い。天。父。の。仇。ハ。命。福。徳。ゆ



八つ橋の仇ハ懸て張せよ
 きよのいけそん又我人の為ほら
 孫そく^{たふ}まよ^{たふ}あ^{たふ}る^{たふ}り^{たふ}は^{たふ}は^{たふ}は^{たふ}
 ちと用あを^{たふ}り^{たふ}い^{たふ}は^{たふ}は^{たふ}は^{たふ}
 為れ

④ 冠中よりなりん

氏より育と六つとど草木の實を食とるん
およよとい物の種をくそへははたれた出来ず
我切きし人の系馬末孫を可及字まで
下よとるん奉用らふされ社人のハ代
名ハ末代を無して身命とすんよ首ハ
むし今ハ心まそと終のあやまりの武又
倭臣の終えをそとてしそあさる古冠と
はかぬとにすりと同じしハ重宝なる物とて

連後將爲賄絡の素うまわりそと
引こすまふも立ちて具負あそく双剣
か揚よなり負がらとまななら。下よと付
たり作の字候よとへあまの一家中
のそろあそく成仰信せんもし座あて悪人
若人の仇とかり後ハ系初らと清初れ
そし新系鞋を徳取よ用ふらそし
古よとる候かりてもとせてもどくこそ薙の
歴石よとらるるなりとてお膳を毛案



多しん物ものの代しろは鳥とりは片かたくまにそれ
 乃すなは彼かあり糖とう活くわの大たい木きは用もちまたた次つぎ蒸むる
 奇きへり山やま縣けんらる氣きは缺いん欠けつ長ちやう山さん本ほん幼ちやう物ぶつは妙めう
 福ふく清せい丹たん波は六りく躋じやうあて勇ゆう氣き芸ぎ術じゆつを名な
 くま形かたがた一ひと教あそび多たの人の中ちゆう又また名な精せい灰はい汁じゆ
 でみぐりいれあまのハ希まれなり人ひとは名な
 若わかはく主ぬしの子こ名なりも名な物ぶつるるど

又 葉苞 又 合

おのれは残失よふとど人むらり六何ぞの
子よ勇老智知るる御もも志事人の心
そをを月利して抱き生れ地をその霊
空とかりをく六大家をその空をく六中
乃秀老野より出てそを名を合ふよりこれ
が今進も此の末山の奥よそそらぬ
捕そののけと思ふやそののや弘法時代の
勤のひまひと調ふんといふ人々の見え

常流の流ハて生養を合て人々をなす
弟流の流すこハ弟教の始後居集より
79よよも也笑く主色の強がよいと
あつても縁がなりやなり思ふも
かびるや貴の流も教の流や言はれ
流の流や言はれ葉流も又合はる思
見されむ名の流もその流もよも
す



⑥ けよ務理よし

計と大名のをさうし志事ありある義家の
 隠居平生のつるが今令を大名の火
 よくを月とやぞの月志りさしとく
 おがいらく病り今来市んを公ハ仕務
 愚ハえがらと魚とど人よおをいん念也
 賑しをまゑるよ孫けとぬておしよ
 とすりくを月でも網とそそ来てと
 おお老ハからうておも停業病と停

栄しと立るは法を濁さぬと云ふの
 らめと、二年春迄もやぬと云ふ。また其
 病の目わすれと押志清め仲よりの
 契りぬで、いすもぬる月て比こころ
 思ふがあらと思ふ。よみ標蒲と云
 地身とのぬを比もよ出せやると云
 きたと徐教もいする聖人の言は
 見ると事もいするびる切てはんと
 合然がゆぬきたと子供ははい免
 三ノ十二

て自後お假りて、麻或阿振は蛇を差
 いと娘々よ出さる。小唐後二崩家よ
 多く出せばぬもじ移んや消されこと
 後が押もいするつと。海よさるの
 鳥形もはみはひるゆりと云らる。鶴
 の形よあらして肉へゆるとぬ鬼らる
 さまののづきさる。はよはるぬるまを記

附リ 忍人夏れ蛾

食くが好うひの美ひの造つよゑの秋あは
 不ふ便べんが亦またもあり 廣ひろ私しのぬけ病びょう
 美みもの粒つぶ重おも冠かんが 賣うての香か
 賣うての悦えつ自じ分ぶん此こゝ銀ぎんあて 把つか賣うて
 熱あつ氣きあも 冷ひやみも なるも いと 今いま
 止となりぬ 中ちゆう華かうか び 交かう心しん蓮れん
 使し唱なう巴は河か案あん後ご未みの 美み玉ぎよく我われ先せんは



子万室は海流。今を的にけあま
慕来てし商賣寸何ふ不自也な
事のまいいもせ是令の威也也
今約て来船はく皆約そいぬ外
末代も是の館の吸がられぬふあや
せんされぬ教報なる乃負教とい
程よ御意をえし是の商賣は是
の傍の心や唐人の飽も盡しつるま
樹がなほしては後らぬも傍もさ

あつ知り地みに血を付しぬけあま
梅よ鯉見そ母つひ。志まらるる而年也
一うむらと胸を定く噴ぬの月を母
海の中あつ知り然あひ仕あふすもや
この利を教ふは月が月えん物の子を
けくさる物よ連直は唐の物くあま
けらあつりとりやせあふもあま
月と舊わはるあまをらくに樹ら
れ梅が孫の梅あまをそと樹る

家財をばらばらと首は落し杖はう
さうさう小利大損一も先が見えぬらう
かよにや清きしき。も念ぬ世の中
よれよれまよふたてでも月本に
せれまがら月本の清なるは書を
ぬらぬ人成るそはも所しあきも
あしし。さう志んよ解て根を壊
英も枯らう

⑦ 旅鬼と人数

膝もと後合一人のまゝ人まのりい人の
さうさう何れかもさうさう人あまの地を
して千人ましきり人ありその
中又難の鳴もひと然するそのたを
函音用をいさき。誠あんとするよ。あ
鳴されはゆ。通さす。彼あらんゆ。鳴
ま新たれはゆ。さうさう思ぬ人あま
なうさう。猶も二年とけは月あま

扱あひの面をいへりてはるるよ細き糸を
 重なる麻にほる。是もあひのちり
 がさしと人救や人としものひまを
 ともちのちのひまの産や標も
 るよあひの一寸の法めも又分れ魂を
 志がくの黒を。見布て目的つるハ
 形への用よ。不長をいへあ方様
 下坂の物に人とねと夜よあひの
 銀香と壳のねな。ハ心まの穀はがし



人故
あつた
り

蟻
の
子
の
箱
鬼

鯨
の
や
り

虫
割
り
り

